



特集 4月渡航

寄稿文

ゲスト 真野 新也氏

- * 石川佳子
- * 内海 眞
- * 岡本裕子
- * 岩崎奈美

渡航記録

渡航費用



ナイロビ



キハラスラム



GEM EAST 村

「アサンテ ナゴヤ」 ニュースレター 第1号に寄せて
石川 佳子

私どもは、2007年9月より NPO 法人 ILFAR NAGOYA として ILFAR ニューヨーク、イルファー 釧路の方々と協働して、アフリカ・ケニア、ナイロビのスラム地区・プムワニ村にて無料医療活動をして参りました。この間、多くの方々のご支援・ご協力を賜り誠にありがとうございました。

平成21年2月22日に、ILFAR NAGOYA の臨時総会が開催され、私たちのアフリカにおける支援活動を、従来のプムワニ村に対する支援とともに、もう少し支援活動の幅を広げ、現地の人々のニーズに合わせた、医療支援・教育支援・自立支援など幅広く支援していくことが確認されました。

それに伴って、私たちの NPO 法人の名称を「アフリカ支援 アサンテ ナゴヤ」と改称し、定款を新たな目的に沿うように改定することが決定されました。「アサンテ」とはスワヒリ語で「ありがとう」という意味です。現在、改定の諸手続きを申請中です。

今回のケニアリサーチの旅は、このような状況を踏まえた上での旅でした。4月17日に関西空港を出発し、4月26日に帰国するという、慌しい旅ではありましたが、多くの出会いがあり、感動があり、私たちの今後の活動に対して大いなる意義のあるものでした。

詳しい日程は、別紙をごらんいただければ幸いです。

各訪問先に関しては、同行の方々がご自身の感想や想いを込めて、紀行文を書いてくださっていますので、私は参加くださった皆様のご紹介と、ケニアで素晴らしい方々に出会うことができた経緯や若干の感想を皆様にお伝えしたいと思います。

今回はアサンテ ナゴヤ関連5名（内海 眞医師、岡本裕子看護師、岩崎奈美事務局、真野新也氏、石川佳子鍼灸師）、一宮中ライオンズクラブ5名の計10名の方々と、ケニアに向かいました。

ケニアへの渡航歴は今回を含めて、内海先生9回、岡本さん4回、岩崎さん・真野さん初回、石川3回、という状況です。私は、それぞれの経験に基づいた感想や想いに興味を感じました。

私たちが支援先確認のリサーチのために、ケニアに出かけるきっかけを創って下さった方のお一人が薬剤師の讃岐珠緒さんです。

讃岐さんは昨年11月、エイズデー間近に私にアクセスしてくださいました。帰国直前までの1年4ヶ月ほど、ケニアにて単独で HIV 感染陽性者に対する自立支援や HIV 感染予防活動をやっていたらっしゃいましたので、何かお手伝いできればという思いから、彼女の活動拠点にもお邪魔することにしました。

ライオンズクラブの方々が、何故私たちと同行されたか？不思議に思われるかもしれませんが、実は、来年の一宮中ライオンズクラブの創立50周年の期に HIV/AIDS サポートセンターをアフリカに贈りたいということで、やはり私どもにアクセスがありました。皆さんも、現地を確認した方が良いということになり、同行していただくことになったのです。



マトマイニ孤児院の菊本照子さんへの訪問は、岡本さん・岩崎さんの強い思いからです。菊本さんは、心に響く言葉、ずっしりとくる言葉を語ってくださいましたが、「スラムは人材の宝庫！貧しいだけではない、チャンスがなかっただけ、こちらが教わるものもっている。」、この言葉は、今回訪ねたいろいろな所で実感しました。また、「根本は貧困。まともに3食、食べる。まともに稼ぐことができれば、普通に人間らしく生活できる。ここでは、それを基本にしている。」という言葉も、心に残っています。菊本さんは、自供自足をめざした施設作りをされています。支援のあり方をしっかり考えさせていただきました。

キベラスラム・マゴソスクール支援者である早川千晶さんへのアクセスは、岩崎さんが何度も何度もしてくださいました。本年度いただきました愛地球博のモリコロ基金で、別紙の如く、沢山の品々を贈呈することができました。30万円の価値がしっかりと生き、贈らせていただいた私たち

も、とても嬉しく思いました。

子ども達はとても元気で可愛く、そして皆、勉学に飢えています。将来のケニアを背負っていくことになるかもしれないこの子達に、セカンダリースクール（高校）や職業訓練校などに進学する道が開けるといいなあと心から思いました。そんな支援もしていきたいです。

コロゴッチョスラムと GEM EAST 村は讃岐さんが関わっていらっしゃる地区です。スラム地区はナイロビの市街地と違い治安が悪いので、どこを訪ねる時にもセキュリティ



として私服警官を雇うのですが、コロゴッチョスラムは特に危険な所と言われており、私たちも緊張しながら歩いていました。でも、こども達はどこでも、笑顔いっぱいです。可愛かったあ〜。

真野さんがお得意の英語を駆使して、現地の男性 HIV 感染陽性者の方々と交流をしてくださいましたが、現地の方々はとても感激されていました。また、女性 HIV 感染陽性者の方々は、ミシン作業などにより、自立に向けた活動をしています。

GEM EAST 村は、経済社会に侵されていない桃源郷のような所ですが、それ故に医療からも取り残され、正確な検査はされていませんが、HIV 感染率も高いらしいのです。私は、その村でにわか鍼治療院を、そして内海先生はクリニックを開設し、どちらも大繁盛でした。ただ、私はいつも素手で治療をしますので、針刺しには細心の注意を払っていたのは言うまでもありません。

今回の旅の目的のひとつに、少しでも多くの方々にお会いするということがありました。連絡役を買ってでてくださいましたのが、内海先生です。事前に小児科の女医さんの公文先生、ケニアに

今回旅の目的のひとつに、少しでも多くの方々にお会いするということがありました。連絡役を買ってでてくださいましたのが、内海先生です。事前に小児科の女医さんの公文先生、ケニアに



着いてからは NGO 職員の宮田さん、獣医師の神戸先生にご連絡いただき、お会いすることができました。ケニアにこんなにも医療関係の方々がいらっしゃるのか？と心強く思いました。これから私たちの活動を遂行するにあたって何らかの形で世話になることでしょう。

また、一宮中ライオンズクラブの深川さんも、現地のケニアライオンズの方々にアクセスしていただき、ケニアライオンズの方々からの懇親会へのご招待や、素晴らしい病院を見学させていただくことができました。

以上のように今回は、これから関わることになるであろう多くの素敵な方々との出会いがあり、多くのことを見聞き、感じてきました。そして、私たちの方向性もほぼ見えてきました。

このリサーチを期に、新たに始まる NPO 法人「アフリカ支援 アサンテ ナゴヤ」ですが、今後とも尚一層のご支援・ご理解の程よろしく願い申し上げます。

LIFE 東海

真野新也

私は HIV 陽性者であると共に、現在名古屋を拠点として HIV 陽性者支援活動をしている団体“LIFE 東海”の代表者を勤めさせていただいております。

そんな事から、今回内海先生からのお誘いで、アサンテ ナゴヤのアフリカ・ケニアにおいての、HIV/AIDS 支援及びスラム地区支援プログラムに参加させていただきました。

以前から、内海先生にアフリカにおいての支援活動についてお話を聞いていました。その時は、単に興味本意で“私も参加してみたい”とだけ思っていました。もちろん参加したとしても、私には医療に関わる事は何一つとしてできることはありませんので、足手まといになるのが関の山とっておりました。

その後、朝のバラエティー情報番組や特集番組などで、海外（特にアフリカ・南米）における HIV/AIDS の実態を見て、陽性者が抱える悲惨な問題を話だけでなく、画像として見て知ることができました。例えば、とある地域において、貧しい部落の男性が出稼ぎに金の採掘に行き、そこで HIV に感染し、部落に戻り奥さんに感染させる。そして妊娠して子供にまでも感染してしまう。最初に感染した旦那は先に逝ってしまい、残された奥さんは HIV 感染者だからと部落からはもちろん、親・兄弟からも疎外されてしまい、貧しいが故に適切な治療も受けることもできない、そして、感染者は一人寂しく“死”を待つ事になることを知りました。現在の日本において、HIV の感染状況には大きな違いがあります。しかし、陽性者が抱える問題には共通する事が多々あるような気がしました。

今回、先生からお誘いを受けて、先ほども述べましたが、私は医療関係の事は何一つできません、しかし、私自身が陽性者であるので、同じ立場で現地の陽性者の人達とコミュニケーションを取り、何らかの力(支援)になれるのと思いました。又、今回は HIV/AIDS 支援だけでなく、スラム地区における支援も行うと言う事で、そちらについても、何かができると信じて今回のプログラムに参加させていただきました。



日本からおおよそ 24 時間かけて、アフリカ・ケニアの地に着き、最初の訪問先はナイロビから 1 時間ほど車で走った所にある、日本人の菊本さんが運営する孤児院でした。そこでは、自給自足の生活で 20 名ほどの子供達が生活をしていました。菊本さんは約 20 年前からこの砂漠化した土地に植樹し緑を増やし、耕して野菜などを栽培し食料としているそうです。施設内には住居のほかに工房があり、そこでは施設の子供達が自立できるように今までに機

織や陶芸をしたそうですが上手くいかず、しかし現在はスポンジを動物の形に削り、そこに羊毛フェルトを針で埋め込むぬいぐるみを作成していました。他の工房では、男の子がビーズなどを使いネックレスなどのアクセサリを作成していました。そのぬいぐるみやアクセサリを街のみやげ物店等に卸お金に換え、孤児院の資金としていたそう。その施設にて、昼食を頂きました。その食事はもちろんその施設内で栽培された食物で、当番の子供たちが料理してくれたものでした。献立はウガリと言う地元の主食、トウモロコシの粉を水で溶き蒸したもので、おかずは緑葉をみじん切りにして炒めたもの、それだけでした。自称グルメ？の私が始めて食した地元の料理、決して美味しいものではありませんでした。しかし、その生活環境からすれば、この昼食は心からの御もてなしと感じました。20年も前から単独でこの地につき、孤児を育て頑張っている菊本さんと子供達に見送られ、その場を後にしました。

次に訪問したのは、ナイロビの一番大きなスラム地区キベラにある、マゴソ・スクール。こちらにも日本人の早川さんが支援活動していました。先ず、このスラム地区キベラは、ナイロビのホテルから30分ほど走った所に有り、定かではありませんが約2.5平方キロメートル、そこに100万とも200万ともいえる貧しい人たちが、トタン屋根でできたバラックの長屋に住んでいるとのこと。もちろん、道路は整備されていませんし、上下水道も整っていません。水はスラムのあちらこちらにある店にて購入、建物の前や横に側溝らしきものが掘られており、そこが下水溝となっているようでした。トイレは共同で、その汚水は何処へ行っているのかは確認しませんでした。想像が頭の中を駆け巡ります。家の中は見学する事はできませんでしたが、一間の家屋に一家族が住み、床で調理して、そこで食事をするのを見ました。そこら中にゴミが散乱し、そこに蠅がたかり、異臭がしたことは言うまでもありません。

そんなスラムの路地を奥に奥にと入った所にマゴソ・スクールはありました。ここは、スラム地区に住む貧しい子供や孤児のための学校で、狭い敷地内に校舎？があり、そこに幼児からの子供達約300人が学んでいるそうです。

先ず、私たちは各教室を見学しました。室内には照明が無く、薄暗い部屋の中に沢山の子供たちが勉強をしているようでしたが、机の上には教科書も筆記用具も無いような状態でした。最高学年の教室では、高校に入るための学力テストをしている所でした。全ての子供たちは、与えられた限りある物の中で、一生懸命勉強に励んでいるようだったのがとても印象的でした。

一通り見学した後、全校生徒からのとても熱い・熱い歓迎の歌と踊りを披露し



てもらいました。そこで見た子供たちは、一応に目を輝かせ、満面の笑みを浮かべ、希望に満ち溢れて、ここがスラムと言う貧しい所なのだという事を忘れさせるような、幸せそのものようでした。

マゴソ・スクールを後にして、私達はキベラ内にあるクリニックを訪問しました。ここには、地元の看護師の女性が一人24時間体制で勤めており、HIV/AIDS及び産婦人を対象に支援をしているそうです。施設としては、とても良い設備などを整えているのですが、とにかく人手不足。医師を常駐させたいとの事でしたが、資金的に無理との事。以前、ある団体から手術設備を援助して頂いたそうですが、医師が居ないために建物奥の手術室で埃をかぶっている状態でした。他にも、同施設内で、ある支援団体がHIV/AIDSに関する活動をしていたそうですが、支援金が途絶えたか何かで撤退してしまい、空き部屋になった状態でした。

次に訪れたのは、ナイロビのホテルから約1時

間車で走った所にある、コロゴッチョと言うスラムでした。ここには、愛知県出身の讃岐さんが支援活動をしている所で、彼女は主に HIV/AIDS に関連した支援を行っているとのことでした。

まず、讃岐さんの案内で一軒の家へお邪魔しました。キベラ同様、トタン屋根でできたバラックの長屋の間、隣の部屋とは壁（土壁）一枚で繋がっており、室内は12畳程だったのでしょうか、3人掛けのソファに小さなテーブル、布を天井から吊るして間仕切りにし、その中にはベッドが一つ。電気は通じているが、ちょうど訪問した時に停電になっており、窓も無く真っ暗。換気する小窓も無く、室内はむせかえっていました。そこには、目に障害を持った子供が体調を崩して、診療も受けられずにいました。その子供に対し、同行した石川先生が治療を行いました。

次に訪問したのが、地元の HIV 陽性者の女性達で運営しているグループの施設。ここは元々、ある老婆の敷地なのですが、そこをこのグループに提供し、活動拠点として使用し、工房・畑・家畜所がありました。工房では、女性たちがビーズのアクセサリーや、ミシンを使ってのバック作りなどをしていました。これらを販売して、活動の資金にしているとの事でした。

次に、同じコロゴッチョ地区を拠点に活動している、HIV 陽性者コミュニティグループの臨時ミーティングに参加しました。このグループは、女性と男性と分かれており、今回は男性のグループへの参加となりました。



今回、6名の陽性者が会場に来てくれて、コロゴッチョでの HIV/AIDS の状況や抱えている問題などを話し合いました。

私自身、名古屋において同じ様な活動をしているので、日本との比較などもお話ししました。感染経路について現地では異性間からの感染が主で

あるのに対し、日本は同性間が主であることで違いがありましたが、陽性者になってから抱える問題については、共通することが多々あるように感じました。



ケニアにおいては、日本に比べ HIV/AIDS に対する認識・知識はあるようでしたが、それでもやはり差別的な問題は切り離せないようで、感染しても表に出す事ができずにいるようです。このコミュニティに参加している会員は、家族等にカミングアウトしているので精神的に救われているようでした、しかし日本においては HIV/AIDS の認識・知識が乏しく、また感染経路として同性間が主たる要因と思われているため、カミングアウトはかなり難しい状況であると伝えました。同時に、日本においてカミングアウトすることにより、話を聞かされた家族等が問題を抱え、悩みを相談する所も無く、ストレスを感じてしまうケースが多々あると伝えると、参加者から日本の状況に感心をもたれました。予防に対しては、ケニア及び日本においても同様で、コンドームを無料で配布しているが、装着に対する違和感から使用しないとの意見が聞かれました。

私にとって、今後このコミュニティと連絡を取り合い、お互いの励みになるように助け合って行けたらと願い、その場を後にしました。

今回、最後に訪問したのがナイロビから車で約9時間離れた、ビクトリア湖畔のホンマ・ベイから更に車で1時間走った所にある GEM EAST 村です。この村は、コロゴッチョにて HIV/AIDS 支援活動をしている現地の女性メリーさんの実家の村で、人口約6000人、その多くが HIV 陽性者である農村地です。前回まで訪問したスラムとは全く違い、とても肥えた土地を持ち、農作物が豊富に実り、食に対してはとても裕福な環境なのですが、収穫された作物をお金に換える手段に乏しく、また教育・医療に対して殆んど行届いていな

い貧しい地域でした。



訪問してまず、その肥えた土地で栽培されている作物を見学しました。芋・かぼちゃ・ピーナツ・トウモロ

コシなどなど、手入れをしなくとも次々に収穫ができる豊かな土地でした。また農地の中ほどには井戸もあり、水に対しても殆んど問題がありませんでした。ただ、その井戸は掘削しただけで、ポンプも無く、開けっ放しのため、衛生面に対してはあまり良い物ではありませんでした。

農地を見学した後、内海先生と石川先生による診療が始まりました。この村にはもちろん医師が居らず、一番近くの医療施設は来るまで1時間ほどの所にしかなく、また村民はお金が無く治療を受けたくても受ける事ができない状況でした。よって、この診察に対して多くの人々が私たちのところへ駆けつけてきて、診察に長い行列ができた状態でした。内海先生が診察を続けていると、ある成人の女性の様態がとても悪く貧血で倒れてしまいました、今にでも治療が必要だとの判断でしたが、クリニックへ行く手立ても無く、またお金も無い状態。急遽、村人と私たちでカンパをし、私たちをこの村まで連れてきてくれたドライバーに頼み、ホマ・ベイにあるクリニックへ搬送しました。結果、何時間も掛けて行ったクリニックでは、お金を持って行ったにも拘らず、適切な治療もされずに追い返された状態でした。この国における医療の矛盾を目の当たりにしました。

午後の時間を殆んど診療に費やしましたが、内海先生は持参した薬にも限界があり、また納得のいく診察ができず、診察のフォローアップができないことによるジレンマから、不完全燃焼の結果となったようです。

しかし、村人たちは私たちの訪問を心待ちにして、ほんの1日の滞在でしたが、とても喜んで

られました。

今回のプログラムの全ての日程を終わらせて、私自身多くのことを見て・聞いて・感じ・学ぶ事ができました。

現地で支援している方々から、同じ様に言われたのが「一時的な支援は要らない、真の支援は、現地の人々が自立し、自分達の問題は自分たちで解決できるように導く事なのです。」との事でした。

経済的に裕福な私達は、私たちの感覚から見た貧しい人達のために、単に金銭的な援助をすれば人が救えると勘違いしていたように思われます。昨今、テレビなどでも“貧しい国の子供達に学校を作ろう”と有名タレントが寄付を募っています。しかし、今回私が現地を見て知ったのは、立派な施設を寄贈され最初のうちは良かったが、現地の人々はその施設を継続していく手立てを知らない。学校ならそこに常駐する教師が居ない、教科書がない、よって廃校になってしまう。医療施設ならば、医師や看護師が居ない、薬がない、などで廃業してしまう。

今回このプログラムに同行した、一宮中ライオンズクラブの一人が始めてナイロビに着き、ホテルまでの車中から街中に沢山居る物売りの子供たちを見て「かわいそうで仕方なく感じる、子供達に目をあわすことすらできない。お金をあげれば良いのか判断に困ってしまった」と言われました。現地の早川さんはそれに対し「そのように感じる事が大切です。しかし、そこでお金を与えた所で何も解決にはならない、お金をもらう事により、その子供は自立できなくなってしまうのです。」と厳しい言葉のように感じましたが、これが現実なのだと言われました。



このような状況を、支援する立場の人達がどのくらい知っているのでしょうか？少なくとも、現

地に行った私たちが、見て・聞いて・感じた事をより多くの人達に伝えることが重要な事ではないのかと思いました。

私の一意見として、もしできることならば、広域な支援を考えるよりも、例えば今回訪れた GEM EAST 村をモニター地区として、HIV/AIDS 及び生活支援の対象にし、教育・医療も含めて、この村が独自に自立できるように支援できるようにしたのならばよいのではないかと思います。

何年かかるかは分かりませんが、村自体が自給自足でき、子供達が行き届いた教育を受ける事ができ、それに伴い農作物を経済の糧とし、繁栄して医療等の福祉を受ける事ができるようになることによって、村全体が潤う事ができたならば、他の村やスラム地区などに反映できるのではないかと思います。

最後に、以上のことを踏まえて、今後もこのような支援活動の機会があるのならば、積極的に参加をしてケニアにおいての HIV/AIDS 支援を重点において、活動をすると共に、地元東海地区においても HIV/AIDS の支援活動も進めていきたいと思ひます。

新たなケニアとのかかわりを求めて

内海 眞

2000 年から 1 医療者としてケニアとのかかわり続けてまいりました。具体的には、ナイロビのスラム、プムワニ村で年に 1 度の医療活動に参加するというものです。この活動に多くの人々が賛同し、実際にケニアまで出向いてくださった方々もいましたし、日本国内でその活動を支援して下さる多くの人々にも出会うことができました。また、昨年にはこの活動を支援する NPO も立ち上がりました。皆様の温かい心に深い感動を覚え、この活動をさらに継続していこうと心を新たにしていたその時に、これまでの活動のボスであった稲田氏との方向性の違いが表面化し、私は彼か

ら離れることを決意いたしました。ただ、アフリカへの思いは強く、またこれまで支援して下さった人々の気持ちを今後もアフリカに届ける義務もありますので、活動は別の形で継続しなければならない、と思っていたところ、ケニアで自立支援活動を展開している薬剤師の讃岐さんに出会うことになったのです。彼女の自然な形の活動には教えられることが多く、アフリカに出向いて彼女から学びたいという気持ちが強くなったこともまた事実であります。そんな心的背景の中で今回のケニアの旅が計画されました。今回の旅は、新たなケニアとのかかわりを求める旅と言っていいかもしれません。そして今回の旅は、私に進むべき方向性と展望を与えてくれるものであり、多くのことを学ぶとともに新たな感動も味わうことのできた旅でもありました。



今回の旅は、まず讃岐さんがかかわっている 2 つの場所を訪問することを中心に、ケニア最大のスラムであるキベラのマゴソスクールを見学すること、そして実際にケニアで活動をしている日本人の方々にお会いしてお話しをうかがうこと、の 3 つの目的を掲げました。スケジュールはかなりタイトでありましたが、今振り返りますと不思議なくらいスムーズに計画が実現されるとともに、計画を超える出会いもあって、本当に充実した旅になったと思います。

4 月 17 日金曜日、仕事を終えてから多くの荷物を抱えて関西空港に向かいました。病院から名古屋駅までは、同行する真野さんの妹さんが車を出してくださいました。関空からはカタール航空の飛行機に乗り込み、ドーハ経由で約 20 時間をかけてケニアのナイロビ空港に到着しました。私にとっては 1 年半ぶりのナイロビであります。ビザの取得代金がこれまでの 50 ドルから 25 ドルになったのには助けられました。ホテルはナイロビの

中心街にある古く比較的安いホテルでした。買い物には便利でしたが、夜中に大きな音の音楽が外から入り込んでくるのには少々悩まされました。懐かしいケニアのビール、タスカが疲れを癒してくれたのは言うまでもありません。

19日の日曜日には、ナイロビ郊外にある菊本さんの施設を訪れました。菊本さんは若い時からケニアの孤児のために働いてきた人です。以前新聞の記事で、ケニアで活躍していることを知ることになりました。岡本さんがその記事を教えてくれたのです。彼女の施設は自立を目指す施設で、現在20名弱の子供たちと共同生活を営んでいます。彼女の言葉に「私がいなくなってもみんなが生きていけるようにしたい」というものがありました。噛みしめなければならない言葉です。彼女の目は本当に優しく涼しい目でしたが、厳しさも同時に湛えていました。本物の人物に出会った気がしました。

20日にはマゴソスクールに出かけました。現地で働いている早川さんの紹介です。300人を超える子供たちが勉強しており、我々を歌と踊りで歓迎してくれました。この学校は10人の兄弟姉妹を有するリリアンという黒人女性が開いたもので、彼女の努力と実行力と情熱には本当に頭が下がりました。失礼ながら彼女の年齢を訊いたのですが、41歳とのことでした。41歳の若さでこれだけの事業を行っていることに、再度驚きと感動を覚えたものです。子供たちとともに歌い踊っている彼女の表情の中に、聖なるものを発見したの



は私だけではなかったと思います。

マゴソスクールの帰りに、キベラにある診療所を訪

れました。フリーダさんと呼ばれている50代の助産師さんが、24時間体制で働いている立派な施設です。立派と言っても、スラムの建物との比較でしかありませんが、それでも2階建てで部屋数

も多く、且つ奥には手術室までが用意されていました。しかし、残念ながら手術をする医師は来てくれないようですし、彼女を支援するスタッフも今はいないようです。つまり、宝が生かされていないのです。我々も何か建物を建てると、それが自然に活用されるような希望といいますか錯覚にとらわれます。しかし、現実は厳しく、運営はままならぬようです。人の力が大切であることを思い知らされました。

翌21日の火曜日には、讃岐さんが活動しているスラムのコロゴッチョに向かいました。ナイロビ



の中心からは少し離れており、車でないと行けないところですが、警備の人を一人雇ってスラムの中に入っていました。コロゴッチョはナイロビの中でも最も危険なところだからです。コロゴッチョでは讃岐さんの友人で、様々な自立支援活動をしているボランティアの方々に会うことができました。彼女たちは人々の健康相談にのったり、**income generating activity**を立ち上げたりしてコロゴッチョの人々のために働いています。我々ができることは、彼女らの要望に従った支援ではないかと思えます。支援の内容をこちら側で考えたり想像したりするのではなく、彼女たちとともに過ごし、話しあいながら、彼女らの本当のニーズに耳を傾けることが重要ではないかと思えます。

午後にはHIV感染者である男性のグループと話し合う機会を持ちました。ケニアではこのようなグループは少ないようです。彼らは率直に彼らの体験を話してくださいました。一緒に行った真野さんのリードがうまかったこともありましたが、とても和やかな雰囲気の中で語り合うことができました。不安や孤独を乗り越えてこられた人々の言葉の重さを感じました。この会のリーダー

ーである Douglas が早速彼のグループの活動報告をメールで送ってくれました。残念ながら忙しさのためにまだ十分読み切っておりません。彼を通してケニアのニーズを教えてもらいたいです。

21 日の夜には中華レストランで公文先生とともに食事をしました。公文先生は北海道大学出身の小児科医で、ケニアで長く仕事をしている方です。現在は JICA の事務所にお勤めですが、以前はケニアの西部の町 Kisii に医療相談や診療に出かけておられた方です。柔和な笑顔と静かな語り口がとても印象に残る女性でした。私が見るところ、臨床の好きな先生です。後で述べることになる Gem 村の健康相談にのっていただけると大変ありがたいなど、勝手に思っていました。私たちのできることには限界があります。小さなことしかできませんが、多くの方々と連携すれば、何倍もの大きさになっていくと思います。ケニアで活躍されている日本人との連携こそ、我々にとって必要な方法と考えます。



2 泊 3 日の Gem 村への小旅行は、誠に充実したものでした。ナイロビから車で 8 時間ほどの距離に

ある Gem 村は、讃岐さんの友人である Mary の出身地だそうです。彼女のお父さんが同行してくださいました。Gem 村は人口 5~6000 人の小さな村です。主たる産業は農業で、多くの人々は自給自足の生活をしています。外部との交流も少なく、教育水準も低いようです。HIV 感染率も高いのですが、十分な医療を受けることも、また検査を受けることもままならぬ現実があります。しかし、ここには肥沃な土地とみどりと美しい空があります。人々の心も素朴で、こちらの心が洗われるように思われます。お父さんの生家で暖かいもて

なしを受けましたが、思い出深いものでした。午後からは数十名の人々の診療を行いました。対症療法にとどまり、不完全燃焼状態でした。人々の食習慣や生活習慣をきちんと把握すること、1 回だけの診察ではなくフォローアップが必要であること、できれば簡単な血液検査が必要であること、そして正確な診断のもとに治療や生活習慣の改善を指導していかねばならないことを痛感しました。すぐにはできないかもしれませんが、将来は上記の診療ができるようにしていきたいと思います。日常的な健康相談も重要であります。ケニアに住む医療者が 1 あるいは 2 か月に 1 度でもいいので、この村の人々の健康相談にのっていただけるとありがたいと思います。それに必要な資金は、アサンテ ナゴヤから出せばいいのですから。

20 歳の女性が強い貧血で我々のところにやってきました。性器出血が多いようです。倒れんばかりの状態、心不全状態にあると思われました。正確な診断とそれに基づいた治療が必要と判断しましたので、病院に入院することを勧めました。カンパを募って 1 時間半ほど離れている町まで車で運んだのです。ドライバーは我々をナイロビから Gem 村まで運んでくれた人です。彼は快く引き受けてくれました。4 時間ほどして彼らは帰ってきましたが、入院はできなかったのです。マラリアの検査だけで帰されてしまったのです。無念さを感じました。翌日別の町である Kisii に運ぶことになりました。のちに讃岐さんから聞いたのですが、2000cc 近い輸血が実施されたとのことですが、病名は不明でした。この村の人々は医療から隔絶されているように思われます。上記患者さんのような緊急事態になってもなすすべがありません。車がないからです。今、この村に一番必要なのは車なのではないかと、強く感じました。車があれば病院まで患者さんを運ぶことができます。また、農作物も市場へ運搬でき、現金収入の手段にもなり得ます。現金は教育の資金となり

ます。医療者を迎えに出ることも可能になるのではないかと思います。幸いこの村には、村の発展を望むグループが存在します。彼らに車を贈ることによって、いくつかの問題は解決の方向に向かうことが予想されます。幸い、アサンテ ナゴヤには積立金もあります。今、それを彼らのために使う時ではないかと思うのです。

別れの時がやってきました。夕暮れ時に村の人々は我々に祈りをささげてくださいました。Maryのお父さんが英語でとなえてくれましたが感動的な内容でした。私たちとともに同じ夢を見よう、という言葉には我々を迎えてくださる心と、一緒に未来を創っていこうという彼らの気持ちが込められていたように思います。Gem村にかかわっていききたい、という強い思いが湧いてきた瞬間でした。ナイロビからかなり遠い地ではありますが、来年もまた来たいと思いました。そして将来は、Gem村の人たちにHIV検査や無料診療などが提供できるようにしたいものです。

夜にはナイロビ在住の神戸先生（獣医）とともに食事をする機会に恵まれました。幸運です。現



地で連絡が取れたからです。神戸先生とはケニアに来るたびにお会いしていましたが、じっくり話すことは余りあり

ませんでした。今回はいろいろなお話を聞くことができました。ケニアをもっとよく知っている日本人ですし、コロゴッチョとも関係があるようです。今後は連携を深め、我々の活動を助けていただきたいものです。

最後の土曜日には、ナイロビのライオンズクラブが経営している病院を見学しました。乳幼児のHIV外来と、眼科、耳鼻科、歯科などの診療を中心に行っている病院で、多くの患者さんが来院していました。貧しい人々には無料診療を提供し、病院の外にまで巡回診療をしていました。経営は当然のことながら赤字で、毎年約一億円を投下し

ている規模の大きな事業であります。我々はこのような大きな事業は到底できませんが、小さくてもいいので我々のできる範囲の持続性のある活動を実施していきたいと思っています。



今回の旅はとても充実した旅でした。今後のアサンテ ナゴヤの方針を決める調査旅行でもあつ

たわけですが、無駄な時間が全くなく、毎日が変化に富み、多くのものを学ぶことができました。支援活動の精神も教えられましたし、ケニアで活躍している日本人からも多くの情報を得ることができました。今後の我々のケニアにおける活動の場やその内容に関しても、今回の旅行に参加した人はおそらく同じような思いを抱いたのではないかと思います。岡本さんがいみじくも言われましたように、今回の旅は多くの出会いがあり、今までのケニアの旅の中で最も充実し感動的なものでありました。この経験を今後の我々の活動に生かしていくことが大切です。

今回の旅の準備に関しましては、事務的なこと的一切を岩崎さんがやってくださいました。また、現地の人々との出会いは讃岐さんがアレンジしてくださいました。英語の達者な真野さんには大いに助けられましたし、岡本さんには菊本さんや公文先生との出会いを準備していただきました。心から感謝したいと思います。また、一宮中ライオンズクラブの方々には、楽しい思い出を作ってくださいましたし、石川さんには我々とライオンズクラブのつなぎ役をしていただきました。ありがとうございました。今回の旅は、今後のアサンテ ナゴヤの新たな活動のスタートとなる、記念すべき旅になったと思います。

ケニアリサーチツアーに参加して

岡本裕子

今回のケニアリサーチツアーに参加させていただいた事、アサンテ ナゴヤの方々には深く感謝いたします。ありがとうございました。日々楽しく、チャンスがあればお会いしたいと思っていた方々にお会い出来、充実した旅でした。ケニアの訪問は4回目になりますが、4回目にしてケニアを知る旅が出来たのではないかと思います。

* 日程にそって感想を記入して行きたいと思っています。(プムワニでの医療活動と比較してはいけないと思いつつ、比較しています。

どうしても、過去3回のケニア訪問が基準になってしまいます。すいません。)

・早川さんのレクチャー

ケニアの歴史、現状についての学習は、本来なら2005年に始めてケニアを訪問する時に図書館でも行って、自己学習しておくべき事だったと思います。「大丈夫々」の言葉に甘んじて、何の知識も無いままケニアでの医療活動をしていました。少しでも学習していれば違った角度からの見方も出来、理解出来る部分もあったのではないかと反省します。

今回はツアーを始める前にケニアの概要を学習することが出来、それを踏まえてのツアーは視野も広くなり、寛容になれる所もあったように思えます。

大きな話をするならば、そして早川さんの言葉を借りて言えば、地球と言う星に住む同じ人間としてより良く生きて行くには、彼らが自分達の力で自立し、ケニアの未来を築いていくことが望まれますし、自立していかなくてもはなりません。そのために私達はどのように関わればよいのでしょうか。また、そこに暮らす人々の歴史、文化、自然環境、部族、宗教等を考慮し、どのような支援をしていくのがよいのでしょうか？。支援々と考えていると、見守る援助という言葉が頭を過ぎりました。ズーと先にはそうありたい物だと思いま

す。そしてそのための教育、環境の整備など大きな課題を抱えている現実のどこから手をつければ良いのかと考えさせられる事の多い日々でした。



神戸先生との会話の中で、プムワニでの医療活動で、プムワニの人達がただ血を採って持っていくだけというよう

な事を言っていたとお聞きしたときは、ああやっぱりな・・・と行ってしまいました。残念な話です。プムワニの活動はやりっ放しのイメージがあります。もったいない話です。ただやってあげているだけでは何も変わらないのです。医療活動をするにしても、同時に生活環境も考えて行かないと改善できない事が多い現状です。どんな活動をするにしても、まずは出来る事からこつこつとやっていけばと思います。それから、何事も限界があります。その見定めは難しいと思いますが、無理せず出来れば良いと考えます。

・マトマイニ・チルドレンズホーム（菊本照子さん）訪問

以前、菊本照子さんの記事を新聞で知り、機会があれば一度はお目にかかりたい、お話をお聞きしたいと思っていた方だったので、こういう機会を作ってくださった方々には感謝します。過去3回のプムワニでの医療活動をした時「ナイロビ市内の病院とか施設見学ができないのか。また、ケニアで活動している日本人も多くいると聞く。そういう人達とか他のボランティア団体との交流会とかできないのか。」と提案していたが、現地で活動している人、団体等との交流会を開催するのは、過去の経験から難しく、何のメリットもないというようなコメントで実現することはありませんでした。なので、現地での交流会等は困難なものだと思っていました。ところが、何と言う事でしょう。菊本さんのみならず、多くの方にお会い出来、いろんな施設を訪問することが出来、

今までは何だったんだと残念に思いました。プムワニでの医療活動で損をしている部分ではないかと思えます。

菊本さんの言葉には重みを感じました。支援はかならず終わりがある。その住民が後どう引き継ぐか。援助の蟻地獄をどうするのか？。抜け出す方法として、人作り（人が育っていない）、知識（ケニア人は知識の切り売りをして、分け与える精神が無い）、自立心をくすぐる。住民の意思に基づいた改善。自分達にも出来る物がある等々、支援をして行く上でのキーワードとなる事を学んだ気がしました。また、植林もされており、環境問題も考えて行動させている事には頭が下がります。まだまだ学ぶことがあると思えます。機会があれば、マトマイニに宿泊させていただきたいものです。

・ キベラ、マゴソスクール（早川千晶さん）訪問

キベラの中を走る
自動車、一度は見てみ
たい。その線路、一
度歩いてみたい。映



画、テレビで見る度に思っていました。それが叶うとは……。自動車は見ることはできませんでしたが、線路を歩くことができました。不謹慎ですが、嬉しかったです。ただあまりの汚さがっかりもしました。綺麗にできるものならば綺麗にしたい！。側溝に炭を置くとか（翌日には無くなっていると思えますが……）水を浄化する植物を置くとか。また、プラスチックの物なら、例えばあるメーカーが作ったプラスチックを溶かしてガソリンにする機会を使うことによって、プラスチックゴミを処理するとか、生ゴミ的な物はたい肥にするとか……。ゴミ処理については日進月歩です。学習と教育で変化が期待できると思いません。

マゴソスクールを訪問し、早川さんの活動も凄いとしかいいようがありませんでした。現地の

人々との信頼関係、ネットワーク、リーダーシップ、この類の言葉なら何でも当てはまる思いました。できることからコツコツとやってきて、今があり、今は通過点に過ぎなくて、まだまだこれから……。何があっても逃げない前向きな行動。何がそうさせているのかとふと考えました。「同じ人間だからできることをやりたい」この言葉を思い出しました。

スラムの大きな問題は貧困です（スラムで無くとも日本でも大きな問題ですが）。政治、社会環境等簡単な問題ではありませんが、教育すること、働く環境、生活環境を整えることで将来に変化をもたらすこのちょっとした力にはなるのではないのでしょうか。私達はどんなお手伝いができるのでしょうか。私の望みを言えば、何らかの教育を受けた子達が、帰って来てくれて、この地で活動してくれる事です。

・ コロゴッチョ（讃岐珠緒さん）訪問

スラムの中でも一番危険なスラムと聞かされましたが、道も広く、一見した所ではキベラ、プムワニより環境がやや良いように思えました。

讃岐さんがいろんな面で支援されておりコミュニケーションもとれていて、何らかの活動をやる場合はやりやすい面も多いのではないかと思います。また、HIV陽性者の方達のグループもあり、医療活動（HIV/AIDS等）への協力等も得られるのではないのでしょうか。

コロゴッチョへの関りは、讃岐さんの今後の計画、希望を考慮して検討していく必要があると思えます。讃岐さんの活動について、神戸先生より折を見てコロゴッチョを訪問しましょうと言って下さったことには、感謝いたします。

・ GEM EAST村訪問

豊かな緑、綺麗な空、澄んだ空気、肥沃な大地、ここがアフリカ？ケニア？と目を疑いました。なんて良い環境なんでしょう。反面、この環境が保たれていることの問題もあります。文明の力は有難いものですが、自然にとっては必ずしも良いも

のとは言い切れません。このバランスをうまく保ちながら、改善していくのは難しい事だと思います。また、部族のルールを守り、伝統、文化、歴史を尊重しつつの支援も時間もかかる事でしょう。当たり前のことですが、そのための信頼関係、教育、話し合い・・・といったことは慎重に進めていく必要があると思います。1つ間違えば、資本主義の儲かればいい、金が入ればいいということになりかねません。何らかの企業が入って来たら、あの自然は終わりです。あの自然、環境を守りながら生活水準を上げるためにはどのような支援がよいのか、考えていけば良いと思っています。

GEM EAST村の人口は約6000人で戸籍のようなものもあると聞きました。私の夢を語るならば、全員の健康診断をしてみたいものです。日本で行われているような、身長、体重、血圧、尿検査（テストテープで出来る）、問診、採血検査



(肝機能、腎機能、貧血、脂質、HIV、血糖?とか)、心電図、出来れば胸部のレントゲン、そして診察。そして、栄養指導、健康相談、病気に対する指導、健康指導・・・等々。継続して見て行く事が出来ればいいなと思っています。

それから、将来この地で医療なり、学校の先生として活躍してもらえるよう、この地で生まれ育った子供に教育の場を提供し、進学への支援なども出来るといいなと思います。(この辺りの地域はスラムとは違うと思うのですが、海外青年協力隊などは入れないのでしょうか?安全の問題はどうなのでしょう?)

内海先生が提案してみえた、車が1台あれば作物が売りに行ける。病人がでた時、病院まで運べる。は良い案だと思います。しかし、いくつかの問題もあるように思います。また、ルール作りも必要だと思います。検討していけば、今の所、支援

しやすい事なのではないかと思います。

ししやすい事なのではないかと思います。

神戸先生がお話されていた、発光ダイオード?液晶パネル?を使った電気の配給の案も実現可能ではないかと思いました。あの村に電気をひくのに、10万円ほどあれば出来ると聞いたような気がします。

夢のまた夢の話をするれば、部族の関係、生活、習慣などが違うのでかなり無理な話ですが、スラムの人で、農業などの興味のある人を移住させて、あの自然の中で生活できたらなーと思ってしまいます。

トマト栽培について聞かれましたが専門ではありませんから指導は無理です。ですが、マトマイニでいただいた通信にマトマイニ出身の男性がトマトの栽培の指導をしている写真が載っていました。マトマイニに相談してみるのも1つの方法かと思いました。コーディネートすることも必要だと思います。

アフリカ・ケニア

岩崎奈美

それはキベラ・スラムでのことでした。

マゴソ・スクールの1年生から8年生約100名の生徒さん(訪問時は夏休みで、通常は300名以上在籍するそうです)、スクールの卒業生、先生方、ふらりとやってくる音楽家、早川千晶さん等々の大歓迎を受け、別室で美味しい昼食をいただいた後、一人、先ほど大歓迎を受けた場所に戻ってみると・・・そこはほんの少し前と全く違った空気が流れていました。2階建



てのスクールの中央に位置するその場所は縦3メートルぐらい、横8メートルぐらいの空間です。見上げるとその分だけの空が見えました。教室が左右に2つか3つ(1つの教室は6~8畳ぐらい)並んでいて、つきあたりには水場(各自お皿を洗

います)、調理場、集会場などが、ぐるりと空間を囲っています。ふと教室の入り口から中をのぞいて見た時です、8歳か9歳の男の子と目が合いました。「あっ!勉強してる。」と思ったと同時に男の子はノートに目を戻し、すぐ勉強を再開させたのです。わずか数秒のことです。私は「ごめんなさい」と日本語で言っていました。入り口から差し込むわずかな光の中、日が暮れるまでの時間を惜しみ懸命に勉強する姿でした。彼らの日常を邪魔してしまい、ほんとうに、ほんとうに申し訳ない気持ちでした。

子供達に、将来どんな職業に就きたいですか?と尋ねると、「お医者さん」「看護婦さん」「学校の先生」等々、この子供達の希望の実現が、将来のケニアを担うと思うと何か応援したいと思わずにはいられません。

応援や支援の形はいろいろと考えられます。ノート、教科書の購入、昼食の原料購入(とうもろこしの粉)、燃料(薪)、学費の支援等々、どんな形でも子供達に繋がると思います。

しかし外部からの支援はやがて不要になる日が訪れることを予感できました。それはスクールの卒業生が定期的に学校を訪れ、自分達が得たあらゆる知識(勉強・物づくり・おどり・音楽・さまざま部族のなわらし等々)を在籍している生徒さんへ伝えつつ、時間の許す限り子供達と一緒に

すごし、スクールを盛り上げようとしている姿を見たからです。すばらしい姿でした。長い年月がかかろうときっと叶うことだと確信しました。

それからの滞在中、自然と目で追っていたのは子供達の日常の姿でした。黙って小さな赤ちゃんをあやし、やさしく抱く少女、狭い路地を何度も往復しごみを運ぶ青年。彼らのなんでもない日常の姿は、私自身の今後の活動や関り方を考えていく原点となり、そして一番の思い出となりました。



最後に、当 NPO を支えてくださる皆様のご支援と温かいお気持ちを、渡航者のそれぞれの想いと言葉とともに現地の皆さんに直接お届けできたことをご報告申し上げます。また、このたびの渡航では一部旅費の支援も賜りました。この場をお借りしてお礼をお伝えいたします。ありがとうございました。

*** 会費、賛助会費、協賛金をいただいた企業・団体および個人(敬称略)**

稲垣やよい・江崎節子・植木敏子・岡本裕子・河野サトコ・青木孝・佐藤陽子・西山英子・松田真衣
日東物産(株)・金啓正・小木曾義治・小木曾悠紀子・ドリンクス倶楽部ジェムツ・一宮中ライオンズクラブ・高山眞
長久手テニス同好会・野村詳子・菊池恵美子・福澤ひとみ・有村直子・(有)和可奈・真野ふみ子・野村浩子
てらじま美容室・深川善治・グラウ スミスクライン・森下理香・山本直彦・宮本信代・内海眞・石川佳子・岩崎奈美
公益信託 愛・地球博助成金

2008年10月1日から2009年6月15日までに2,023,325円のご支援を賜りました。